

Title	長國寺の鶴
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.22(482)- 22(482)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0022">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0022</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 長國寺の鶴

信州へ旅行の節、松代に立寄つて、舊藩主眞田家菩提所の眞田山長國寺の御靈屋を拜見した。此の御靈屋は維新以前までは五宇殿然として、藪を列れて居つたと云ふが、現今では三字のみ存し、それとても痛く荒廢して修理も充分でない。然し其の中央のものは上田より引移されたもので、約三百年前の建築と云ひ、殿内丹護何れも金碧粲然として相輝き、花卉禽獸の彫刻も亦巧緻を極めて、眞田家の黄金時代を彷彿せしめ得る。其の正面破風の處に見える彫刻の雌雄の鶴は名工左甚五郎が苦心の作と傳へられ、これに次の話が残つて居ると同行のものから聞いた。

或年のこと稻田が極めて豊作で、百姓等其の刈入を樂んで居つた處、愈其の時になつて見ると、一夜毎に何物かに足穂が喰ひ荒されて行くのに氣が付いた。そこで百姓等は驚いて村中總出て詮議した末に、漸くのこと長國寺御靈屋の鶴の仕業と判明したので、早速寺の住職にたのんで其の足を鉄鎖で堅く繋いだ。それから稻田は何等の被害なく終んだと云ふ。この話は日光の居眠猫の話と共に彫刻傳説の一資料として面白いものである。(埃塵録より 武田勝藏)